

---

# 不協和音

千野葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不協和音

### 【Nコード】

N3688A

### 【作者名】

千野葉

### 【あらすじ】

私立姫野学園に通う君島祐斗は両親をある事情で亡くしている。それ以来彼は他人とは極力関わらない生活をさも当然のように続けていた。しかし、ある日学園の敷地内にある講堂前のベンチで彼は一人の少女に出会う。そこから彼の日常は劇的に変化することになるのだが・・・。

## 〃 0 プローグ (前書き)

それは一つの不思議な出逢い。そこから全てが始まり。

## 〇 プロローグ

悲愴。朝目覚めて一番最初に思い浮かんだ言葉がその二文字だった。

自室にはその中を照らす外からの陽射しと、それを遮る数枚の分厚い布　カーテンがある。

布団を剥ぐと少年は我が眼をこすりながら上下淡いブルーカラーのパジャマのまま洗面所へ向かう。

ここは、とある高層マンションの6階窓側から数えて3つ目の部屋。

自室のすぐ隣はリビングで高級そうなソファやテーブルが所狭しと配置されている。

当然少年が買い揃えたのではなく、彼の両親が生前ポケットマネーで購入したものだった。

数分後、一見少年の幼さの残る顔立ちはシャワーから出るとその淡い瞳は鋭さを増していた。

少年はバスタオルで濡れた髪を一頻り拭った後、少し長めの短髪をドライヤーで乾かし、

少年の性格を一層際立たせる濃いグレーの学ランと長ズボンを身につけ本格的に身支度を整える。

少年の通う高校はどんなにゆっくり歩いたとしても5〜6分で着く、姫野学園と呼ばれる都内でも有名な名門校である。

比較的新しく外装が綺麗なのが本校舎。一見して誰もが古いという

印象を受けるであろう建物が別館の図書室。

そしてグラウンドを囲うようにして配置された二つの建物の他にも一つ、ヨーロッパ調の教会のような建物があった。

今は使われていないが、この学園が設立された20年以上前は学園のOBのカップルらが結婚式を開いたりして賑わっていたらしい。

休み時間。授業が終わるや少年はその建物の傍らに配置された、やはりヨーロッパ調の芸術的なデザインの長椅子に座っていた。

普段からあまり出入りのない場所ということで正面のグラウンドに見える生徒らしき人影を除けば、周囲には人影一つ確認出来ない。

少年は無意識に瞼を閉じ、スウ　と意識を沈めると全神経を聴覚に集めると周囲を覆い尽くすあらゆる物音を感じた。

大分距離があるはずのグラウンドで生徒達がワイワイやっている声から、近くで風が流れ、その影響で木の葉が落ちたであろう小さな音まで。

少年の集中力は他人のそれとは桁外れである。それと言うのも普段から心を落ち着け、自らの意識を保つにはそうする他なかったからだ。

少年の両親は両方とも少年が幼い頃に他界している。そのため親戚や俗世間からの気遣いや同情の視線を、少年は幼い頃から浴びてきた。

周りはただそれをするだけで直接自分に関わろうとするものはいないし、酷いときは”可哀相な子”という哀れみの視線を遠慮なしに向けてきていた。

少年はいつしか自分が深い回想に浸っていたことに気づき、瞳を開くと苦笑混じりに改めて椅子に座り直した。

と、そこで普段は人気の少ないはずのこの場所に一つの気配を感じ、ふと視線を上げると、そこには何処か儂げな少女の姿があった。視線はしっかりとこちらを見つめており、しかし少し躊躇いとも取れる感情を浮かべながら時折少年から視線を外したりしている。

少年は長椅子の真ん中に座っていて、それに気づくと彼は無表情のまま席を詰めた。瞬間、少女の顔に驚きが広がる。

しかし、やがて小さく一礼すると少女は少年の隣に座り、やや俯いたまま両手を膝の上に乗せて暫し黙り込んだ。

別に無理に話す必要はないし、少年も足を組むと真正面を何処か遠い目で見つめながら暫しの時を過ごした。

いつもなら他人の存在を察するや真っ先に嫌悪を露わにする少年。しかし、不思議と不快にはならず、ゆっくりとした時間は刻一刻と過ぎていく。

やがて、聞き慣れたチャイムが鳴り、少年が立つとそれを目で追うようにして少女がこちらを向いた。

その瞳は相変わらず悲愴さえ思わせる。彼女に何があったのかは知らないが、少なからず少年は少女に自分と同じ匂いを感じた。

だから近くにいるても不快じゃないし、拒否反応も出なかったのだと少年は理解する。小さく笑みを零す少年。それにきよんとする少女。

しかし、彼女も目の前の少年に自分と同じ何かを感じてかやがてクスツと理由のわからない笑みを零した。

とても、不思議なことである。互いに初対面のはずなのに全然そん

な感じがしない。

むしろ以前何処かで会っていたのだろうかとかさえ感じてしまう、とてもとても不思議な巡り会い。

それが、ちょうど一ヶ月ほど前の出来事である。

く 1 . 徒然なるままにく (前書き)

二人の出逢いは一体何を意味するのか。そして、ある日突然日常に満ちる旋律が乱れ、不吉な不協和音を奏で始めた。



く1・徒然なるままにく

時は流れ、同年10月中旬の月曜日。少年はいつも通り適当に授業に出ると休み時間に学内の古びた教会に足を運んだ。

相変わらず人気のないこの場所は、季節の関係もあってより一層独特な雰囲気を湛えるようになっていた。

周囲を彩るオレンジ色の紅葉と、その木々の梢をあおる小さな風の音色。その一つ一つが少年の心にじんわりと染み渡る。

少年は相変わらずその瞳に鋭さを宿したままベンチに座ると、そつと瞳を閉じ意識的に深く意識を沈ませていった。

安らぎ。暫くして浮かんだ言葉がそれだった。風が少年の少し長めの前髪を揺らし、その感触が少年に伝わる。

本当に小さなことではあるが、少年はそれすら溶け込む空気の中の一つの愉しみと感じていた。

しかし、やがてそれを遮るように声を掛けてくる人物が現れた。

「祐斗さん」

聞き慣れた少女独特のソプラノ。瞳を開くとそこには今や見慣れた一人の少女の姿がある。

髪は腰まである長髪で前髪を眉毛の数センチ下で切り揃え、男子の淡いグレーの学ランとは違い、

女子独特の薄いグレーのセーラーを身につけている。姫野学園指定の女子制服である。

「また、ここにいらしたんですね」

祐斗、と呼ばれた少年は顔を上げると驚きもせずベンチに予め空けておいたスペースを示した。

「……座るか？」

「はい。」

少年　君島祐斗の言葉に促されるままに少女は彼の傍らに腰をおろす。

祐斗は普段学内では誰ともつるまない所謂”一匹狼”だが、彼女は別だった。

というのも、あの不思議な出会いからほぼ毎日のように顔を合わせ、最初は二言三言交すだけだったが、

彼女の何処か遠慮がちな人柄に触れて、時々見せる儂げな顔を見ていくうちにその存在に興味が湧くようになった。

彼女の方も、彼を煙たがることもなく自分から姿を現し、彼の姿を確認するやその存在を安易に受け入れている。

「祐斗さんは休み時間はいつもここにいますね」

ベンチに座るや、少女はおもむろに口を開いた。

それを無視する理由はないから、祐斗はそれに応える。

「ああ……けど、それを言うなら結衣だって休み時間に限らずよくここにいます。それと同じさ」

祐斗は休み時間・昼休み・放課後と事あるごとにこちらの様子を観察していた。

そして、その度必ずそこには彼女の姿があるか、後から姿を現すのである。

「……はい。この講堂、学内の中で一番好きな場所なんです」

結衣、と呼ばれた少女は祐斗の切り替えしに少し驚きながらもやがてクスリと微笑んだ。

神崎結衣      それが彼女の名前である。

初対面こそ一言も交わさなかったが、日を重ねることに祐斗は互いに名前を知らないことが不自然に思え、ある日思い切って彼女に言ってみた。

『      君島祐斗。』

『えっ?』

案の定、何の脈絡もなく祐斗に名乗られた少女は驚いて顔をこちらへ向けた。

それをフォローするように祐斗が再び言葉を付け足す。

『それが俺の名前だ。俺達、何度も顔合わせているのに互いに名前を知らないだろう?    そろそろ名乗ってもいいと思ってな』

『あっ、そうですね』

祐斗がそう言うや、少女は気づいたように声を上げた。  
そして、小さく微笑むとおもむろに祐斗の前へ立つ。

『失礼致しました。私は姫野学園高等部一年、神崎結衣です。宜しくお願い致します』

言うや深々と頭を下げる少女　結衣。物腰の柔らかい印象を受け、それは思いのほか心地良く祐斗の視界に映った。

『宜しくな、神崎』

祐斗は言葉少なにそれとだけ言う。今は初対面から一週間以上も経っており、高等部一年ということは祐斗とタメである。

呼び捨ては少々心苦しいが祐斗は彼女に関して”さん付け”ではあまりにも他人行儀に思える。故に苗字の呼び捨て。

『結衣で結構ですよ。君島さん』

結衣は首を横に振るとにつこりと微笑み心なしか嬉しそうに言った。そこまで言われては祐斗としても後には引けない。照れ隠しに鼻の頭を掻くと祐斗は再び口を開いた。

『なら、俺のことも祐斗でいい。まあ、呼び捨てるかどうかは、そっちに任せる』

『え、よろしいんですか？　えっと、それでは……。』

少し間を置くと、結衣は意を決して言った。

『改めて、宜しく願います……祐斗さん』

『……ああ、こちらこそ宜しく。結衣』

あれから既に三週間。今では教会前は二人の特等席になっていた。

と言っても特にするのではなく、時たま結衣が小説を読んでいた、祐斗が両手を制服のポケットに突っ込みながら周囲を意味もなく見回したりして短い休み時間は終了する。

それがいつものパターン。

「物好きなんだな。今に始まったことじゃないけど」

祐斗は若干冷めた口調で言った。対する結衣は少しだけ意外そうな瞳を祐斗に向ける。

「そう……ですか？ でも、それならどうしてあなたもここにいるんです？」

……その理由は、ここが好きだからではないんですか？」

「ん……まあ、な」

祐斗はお茶を濁すように視線をそらすと短く呟いた。

実際この場所は好きだ。人氣が少ないし静かだし、何より落ち着けるから。

結衣は先ほどの意外そうな表情を消すとフワリと微笑み、軽くパチンと両の手を合わせた。

「あつ、それならあなたも私と同じ”物好き”ということですね」

確かに人気のないここを好きだと言っているのは結衣だけではない。祐斗の言葉を振り返ると

彼もその”物好き”とやらに入るのは至極自然ではあるが、そこまで嬉しそうに言うことでもあるまい。

しかし、祐斗は結衣の言葉を否定するのが面倒という理由から、それ以上は突っ込まなかった。

「ま、まあ……そうだな」

そう言うや視線を宙に戻し、ふと通り抜ける風を受ける。その影響で結衣の長髪が揺れた。

心地良い秋のそよ風は秋の薫りと共に何処か甘い香りを祐斗のもとへ運んでいった。

他愛のない会話。しかし、そこには確実に大切な何かが含まれている。

かつて、祐斗は家庭の事情で波乱に満ちた日々を送ってきた。両親の死去で集まった周囲の視線。周囲の何気ない会話に溢れ出す嫌悪。

やがてそれは祐斗を極度の人間嫌いへと変えていく。

しかし、あの日　結衣と出逢って以来祐斗は変わった。

自分でもわかるほど表情は柔らかく、周囲の同級生とも少しずつだが話をするようになった。

とは言ってもそれこそ初対面の頃の結衣との会話のように

二言三言交す程度だが以前と比べれば、格段の進歩と言えるだろう。

「？　どうかしました……？」

気づくと結衣は小首を傾げ、不思議そうに祐斗を見つめていた。

「いや、別に。」

「そうですか？」

「ああ」

人間変われば変わるものだな、と思っていたことを結衣まで伝えることもないだろう。

祐斗は適当に言葉を濁した。と、次の瞬間聞き慣れたチャイムの音色が聞こえてくる。

「あ、もう時間。」

「らしいな。……っと、そろそろ教室に戻るか」

「そうですね」

祐斗が立ち上がるとそれに続くように結衣がベンチから腰を浮かせる。と、やがて気づいたように声を上げた。

「あ……祐斗さん。」

「え？」

呼び止められた祐斗はきょとんとして結衣を見つめた。

「今日の放課後、少しお時間ありますか？」

「？ ああ、なくもないけど……何だ」

「よかった。私、寄るところがあるんですけど、もし宜しければ一緒に付き合ってもらえませんか？」

そのあまりにも唐突な申し出に祐斗は暫し硬直した。大体自分が一緒に行く必要が何処にあるのか？  
しかし、そんな祐斗を不思議に思っただのか結衣は小首を傾げ、徐々に不安げな表情になっていく。

「……あの、祐斗さん？ ダメ、でしょうか」

結衣にそんな顔を見せられては人としてその申し出を断る訳にはいかない。

「ん……いいよ、別に。どうせ暇だし」

祐斗は少し考える素振りをする和快くそれを承諾した。

「本当ですか？……ふふ、よかった」

目に見えて安心する結衣。ここまで反応が素直だと見ている側としても気持ちが良い。

やがて、結衣は両手を前に持つてくると祐斗に向かって丁寧に一礼



をした。

「それでは、私もこれで失礼しますね」

「ああ。それじゃ放課後にな」

「はい、校門の前でお待ちしてます」

「うい、了解」

言うや、結衣は今一度嬉しそうに微笑みそのまま身を翻すとその場を去っていった。

放課後。校内では部活動をする生徒達で賑わい、それ以外の生徒は次々と校舎を後にしていく。流れていく景色。見慣れた街並。祐斗は隣に人の気配を感じながら学生鞆を背にして歩いていた。

「どうした？」

結衣は先程二言三言交ただけでそれ以降自分から率先して何かを話そうとはしない。

それを不思議に思い、祐斗は結衣に訊いてみた。

「えっ？ な、何がですか」

「いや。さっきからおまえ、落ち着きないみたいだから」

祐斗がそう言うや、結衣は「あっ……」と何かに気づいたような声を上げた。

「……すみません。その、こういうの、初めてなもので」

「こういうの？」

「はい。……こうして、誰かと一緒に並んで歩くこと」

別に居心地が悪い訳ではないが、今まで結衣はこうして友人と下校をすることがなかったらしく、その緊張というものがあつたのかもしれない。尤、祐斗からすればちよつとしたことかもしれないが。

「へえ。結構結衣って、付き合い悪いんだな」

祐斗はからかうように言った。それは自分だって一匹狼という立場上あまり友達というものを作ったりはしないが、それでも昔の自分と比べれば、祐斗は少しずつそれらしき存在を築き上げつつある。その余裕からの発言である。

「そ、そんなこと……ないはずですけど」

「あ。嘘ウソ、冗談だって。」

自分の冗談に目に見えて落胆する結衣を見て焦つた祐斗は慌てて付け加えた。

結衣はというと途端拗ねるように口を尖らせ、俯き加減のまま呟くように言う。

「……そんな冗談、私笑えませんよ」

尤、結衣でなくてもそうだろう。祐斗は空いている方の手で鼻の頭を掻くと小さく苦笑を漏らした。

「悪い。……でも、俺もあまり友達とは一緒に帰ったりしなかったような気がするな」

真横の結衣から視線を外し、祐斗はふと空を見上げた。その瞳は何処か遠く、ほんの少しだけ儚くもある。

「祐斗さん？」

しかし、その結衣の呼び掛けに反応する間もあらばこそ祐斗は再び口を開いた。

「俺、小さい頃に両親を亡くしてるんだ。それ以来極力人との接点を避けてた」

途端祐斗の真横でハッと息を飲む声が聞こえる。ふと立ち止まり、祐斗の遠ざかる後ろ姿を見つめる結衣。

突然のカミングアウト。それは結衣にとって衝撃としか言い様のない出来事だった。

「へえ、学園の近くにこんな洒落た喫茶店があったのか」

外装は清楚な印象の強い純白で統一され、カフェテラスにはフラン

スなどでよく見かける赤と白のパラソルがある。

結衣の寄りたい場所はこの喫茶店だったが、一人で入るのは少々気が引けるため付き添いとして祐斗を誘ったらしい。

立て看板には『喫茶 Schne Traun』とエレガントなフォントで描かれている。

シュネーとは独語で雪を意味する語で、トラウムは独語で夢の意味を持つ言の葉。

ゆえに、ここをよく知る者達は通称、シュトラやら、雪夢<sup>せつむ</sup>やらと呼んでいたりする。

売られている珈琲やお茶は本格的な機具を使用し、珈琲豆は本場アメリカの厳選されたものだけを使い、お茶の葉は紅茶から烏龍茶、緑茶、アップルティー、ハーブティーに至るまで数十種に渡る種類を誇る。若者が集う場所としては最適である。

「……………」

結衣はつい先程運ばれてきたティーカップを見つめながら、しかし口をつけようとはしない。

俯いたまま指先でカップを触ったり、時折小さくため息をついたり。祐斗の言葉に耳を傾けはするものの、話としては全く成立していない。

そして、話題も底を尽き、重い沈黙が二人の間を縛りつける中で。

「結衣。」

「えっ？」

突然何の脈絡もなしに自分の名を呼ばれ、結衣は驚いて顔を上げた。祐斗は祐斗で相変わらず落ち着いた面持ちのまま彼女を見つめている。

「……さっきの話、続きが訊きたい？」

その口調は不自然なほど自然で明るかった。祐斗の顔には今、笑みさえ浮かんでいる。

「あ、いえ……その……」

が、祐斗の言葉を否定しようにも結衣は完全に否定は出来ない。言い訳してこの小さな危機を脱出しようにも理由が浮かばなかった。

思わず目の前のティーカップを煽る。砂糖の甘味と紅茶の苦味が心地良かった。

「……ふう」

小さくため息をつく結衣。祐斗は少し考えたとおもむろに口を開いた。

「気にならないはずないよな。あんな話、急に振られたら」

「え……わ、私は、別に」

無論、気にならない、と言えば相当な嘘だった。

しかし、気になるから、という理由だけで  
祐斗にとってプライベートとも言えることを訊ねられるほど、  
結衣は無神経ではない。

「いや、気にしなくていい。俺も、結衣には話してもいいかなと思  
ってたところだったし、  
訊いて欲しいからこそ、こうして話を切り出したようなものだ。」

祐斗はコーヒークップを煽ると何処か遠くを見るようにして、落ち  
着いた面持ちのまま語り出した。

ゝ 2・Dear MY ・ ゝ (前書き)

祐斗の父、敏彦と母、幸江の生き様とその双方の遺伝子を引き継ぐ  
彼自身の日常の旋律。

## 2・Dear My・・・

祐斗の母・君島幸江<sup>きみじま ゆきえ</sup>は祐斗を生んで間もなく亡くなった。それ以来父親の君島敏彦<sup>きみじま としひこ</sup>が祐斗を男手一つで育ててきた。

敏彦はいつも着物を身にまとい、鋭い目つきで書斎の机にしがみついては、愛用の万年筆を軽やかに走らせる  
そんな絵に描いたような堅物で、それこそ俗世間では”天沼芳樹”  
といえば、それなりに名の知れた小説家だった。

学生時代から創作活動を始め、他界する63歳まで実に57作も書き上げており、

代表作は全盛期の24歳から41歳までの17年の間に書き上げた長編小説 Wild Wingシリーズ 全十二章。

日本文学界でもこの長編ファンタジー超大作は度々話題に上がっており、

今でも数多くの熱狂的なファンが存在する、一種のミリオンセラー小説である。

彼の性格から一作書き上げるまでは誰も仕事場である書斎に入ることは許されない。

以前祐斗は彼の執筆中に迂闊にも書斎の扉を開けて、こっ酷く叱られたことがあった。

祐斗が再び目の前のコーヒークップを煽ると、結衣はそれを目で追う。



「親父、いつも口うるさくてさ、当時小学生の俺にどれだけ雷を落としたか。」

そう言うや少し遠い目をしながら、当時のことを思い出すように祐斗は薄っすらと苦笑いを浮かべる。つられて結衣も小さく笑みをもらった。

「……厳しかったんですね、祐斗さんのお父様って。小説家って訊いて、最初は少し穏やかな感じの方だと思ってましたけど」

結衣は小説家というところマンティストで普段は大人しい性格をしているのではないかとイメージしていたらしい。

事実、現代文学というところションや環境設定などに凝ったり、キャラクタの構築に力を注いでいる創作物が多く、それらに触れていなくても本のタイトルに惹かれ、興味を抱くことは多分にある。

実際、敏彦はそれにピッタリ当てはまる逸材で、だからこそ全盛期の作品を中心に彼が創作・出版したものは今でも多くの人目を引いているのも確かだった。

「元々は大人しかつたらしいんだけどな、ある時期を境に親父は変わった」

「？」

言うや祐斗は空になったコーヒークップをコトツとテーブルに置き

た。

伏目がちで、けれど何処か鋭い眼差しのまま祐斗は続きになる言葉を口にする。

「親父は生まれつき体が弱くて、運動をしてもすぐにスタミナが切れて学校の運動会でさえ、

まともに参加出来なかったらしい……ほら、よくいるだろ？ 必ず、クラスで一人はそういう奴。」

そう。不思議なもので何処の学校でも多少の違いはあれど、共通する性格の子供がいるケースが多い。

クラスの空気を一気に明るくしてしまうほど陽気なムードメーカー。根拠のない自信で自分を高く評価する気取り屋。

何も興味がないと言わんばかりに無口で無愛想なすまし屋。喧嘩のとき、真っ先に中心人物となるガキ大将。

そして、身体、或いは心に傷を持った、普段は大人しいけれど学校行事などでは密かにその雰囲気を楽しんでいたたりする少年や少女。

敏彦は前者だった。そして、普段は然程目立たない少年で当時のクラスでも、特に何をするわけでもなく

ただ冷静に授業を聞いていたり、休み時間には喧嘩の多発する教室の中で静かに外の景色を見つめていたりしていた。

しかし、普段大人しいからこそ敏彦は少しずつ感受性を高め、それはいつしか彼自身の行動を限定するまでになった。

「……それって、どういことですか」

「つまり、感じすぎる感性がいつしかクラス中で親父の存在を、イレギュラーな存在へと変えてしまっていたんだ。

いくら周りの連中が親父を遊びに誘ったとて、極端に不器用な親父にはそれを拒絶する以外は選択がない。即ち」

身体の弱さと天性の人付き合いの悪さから、それ以来彼に率先して話し掛けたりする者はいなくなる。

例えいたとしても、敏彦自身がそこで一步踏み出そうとしなければ、永遠にそれは変わらない。

そんな、いつまでも続く悪循環に胸が詰まりそうになった時、ふいに彼の目の前にある一人の少女が現れた。

少女は敏彦と同じく普段は無口で大人しい生徒だったが、前々から敏彦の寂しそうな背中を見つめては勇気が出せず声をかけられなかった。

しかし、神様の悪戯は不意に訪れた。

ある日の放課後、敏彦が学校の外れのとある丘で相変わらず悲しみに打ちひしがれていた時、突然近くである物音がした。

カサカサッ　　という、近くの草原で感じられる草の間をゆつくりと這うような音。　　そして、敏彦はその正体に気がついた。

蛇である。田舎の野原の中でさえ見ることはあまりないはずだが。

しかし、そんなことを考えていた時、突然近くから悲鳴のような声が聞こえてきた。

思わず顔を上げ、声のした方向へ向かって走り出す敏彦。目標はすぐに確認出来た。

自分と同じくらいの少女が目の中の蛇に怯え、泣き顔になってそれを見つめている。

少女の体は震え、しかし恐怖で動けないのだろうか。その場から一歩も離れようとはしない。

咄嗟近くに落ちていた手頃な木の棒を拾うと敏彦は即座に少女を庇う形となり、蛇にそれを掲げた。

目からは大粒の涙が溢れていたが、その目つきは普段とは比べ物にならないくらい鋭く、力強い意志の力を秘めていた。

それに臆したのかどうかは定かではないが、蛇は暫しその身を揺らすと敏彦らを置いて近くの草原へと消えていった。

「それが……お母様の幸江さんだったんですね」

「そういうこと。それ以来二人は学校でも常に行動を共にするようになった。」

「時を同じくして”学校一静かなカップル”なんて言われ、からかわれもしたが二人は幸せだった。」

つい先程ウェイトレスが運んできた二杯目のコーヒーをジッと見つめると、結衣は何かを考えるようにしてそっと顔を伏せた。

祐斗はそれを知ってか知らずかカップを少し傾け、中身が零れるギリギリのところで固定させるとやがてカップを直角に戻す。

「今まで親父は自分が大嫌いだった。でも、オフクロと出会って親父は変わった。」

よくあることだ。消極的な人間が自分の大切なものを得た途端、別人のように生まれ変わる。

それこそ、身体的に体力が人並以下なのは変わらないが、敏彦はそれを余りある精神力で補った。

しかし、それはあまりに過酷な日々だった。変わったとはいえ元は大人しい敏彦である。

迫り来るプレッシャーに押し潰されそうになりながらも彼は毎日を必死に生きた。

そして、度々限界が近づき、幾度となく倒れはしたもののその都度、幸江が敏彦を介抱した。

幸江は「私にはあなたの力になれるとしたら、これくらいしかないから」と度々自嘲的な笑みを零したが、この事が返って病弱な敏彦を強くした。

当然肉体的ではなく精神的にであるが、敏彦は幸江の包容力に支えられてばかりいることに言い様のない苛立ちを感じ、更に自分を極限まで追い詰めていった。

そのせいかお陰かは定かではないが、敏彦は見る見るうちに精神的な成長を遂げた。

彼にとつては唯一にして最大の支え 幸江がいたからこそ今の自分があるのだと、彼は自ら語っていたという。

「でも、その無理がたたって親父は高校一年生の秋、本格的に病に倒れた。」

訪れる重い沈黙。やがてフツと自嘲的な笑みを零すと祐斗が改めて

口を開いた。

「……悪い、つまらない話しちまったな。今の話は忘れてくれ」

途端歯切れが悪くなった祐斗はコーヒーを飲み干すとその場に立ち、自分の分の勘定をテーブルに置くや、近くの学生鞆を手に取り、腕時計を見た。

「そろそろ時間もヤバイな。家まで送ってやるよ」

「……はい」

そして、喫茶店からの帰り道。既にオレンジ色の夕陽が見慣れた街並を真っ赤に染めていた。

何の感情も感じさせない表情の祐斗の真横、やや後方を歩く結衣の表情はやはり優れない。

結衣として感受性が鈍いわけではない。祐斗の話にその背景をイメージするくらい簡単である。

そして、だからこそ余計な口を挟むことなど彼女には出来ない。そうしたところで、彼が虚しくなるのは目に見えているのだから。

「おい……何か話せよ」

不意にそんな言葉を投げかけられ、結衣はハツとして顔を上げた。案の定、視線の先には真剣な眼差しの祐斗がいる。結衣の胸がチクリと痛む。

「え？ あっ……はい」

しかし、特別話題もなく、いつしか結衣はちょっとした罪悪感に襲われていたため、続く言葉が見つからない。

祐斗とは違い、結衣は10年程前のある事故によって父親を亡くしていた。結衣がまだ、幼稚園の年少の頃だ。  
それ以来、結衣の母親・神崎珠美かんざき あけみは女手一つで彼女をここまで育ててきていた。

とはいえ彼女はまだ健在で、今も自宅にて夕食の用意をしながら結衣の帰りを待っているのだが、  
そのため結衣には彼の話が他人事とは思えず、迂闊な発言は慎むべきだと先程から口籠もっていたのだった。

「……ごめんなさい」

「? ……なんで謝るんだよ」

祐斗は不思議そうに、しかし少し怪訝しながら言った。  
だが、結衣からは何の返事も返ってはこない。

少し考えると祐斗はおもむろに口を開いた。

「……まあ、いいか。とにかく行くぞ。」

結衣のオフクロさん、心配してるかもしれないからな」

祐斗にとっては、結衣が何故謝ったのかは大体想像がつくし、何より周囲が段々暗くなってきている。

そのため一刻も早く彼女を家へ送り届けるのが先決だと判断した上で、祐斗は敢えて結衣を帰路へ促した。

「っ…………ふう。」

結衣を彼女の自宅まで送った祐斗は着替える余裕があらばこそ、制服のまま自室のベッドに倒れ込んだ。

結果的に生い立ちの「お」の字も話せなかったが、それでも今祐斗の身体の周囲を覆う疲労は普段とは比べ物にならない。

それほど彼女に自分の身の内話をするのは大変なことだった。それこそ、聞いている結衣に勝らずとも劣らないのは確かであろう。

「…………やっぱ慣れないことはするもんじゃないな」

苦笑混じりに祐斗は仰向けになると既に陽光の閉ざされた自室の天井を見上げた。もう電気を点けずとも瞳に映るその景色は浮かぶ。

何より身体のダルさが祐斗から電気を点けるという単純作業さえする気をなくさせ、同時に暗闇に妙な心地良さを残した。

不思議と疲れが次第に引いていくのを感じながら、祐斗は不意に起き上がった。

「さすがに、このまま寝たらマズイか。しゃーない」

言うや学ランのフックを外し、そのままチャックに勢いよく手を掛ける。

途端一斉にチャックが落ち、中に着ているYシャツが露わになった。

今日は色々ありすぎた。明日に備えるには、風呂入ってそのまま寝てしまうのが一番だ。



翌日の姫野学園一年A組の授業風景。窓際の席に座る祐斗に、教壇に立つ教師の言うこと訊いている様子はなかった。

頬杖ついて窓の外を見つめている。その視線の先 教会前のベンチには人影一つ見当たらず、気づくと淡い靄がかかった。

気づいたように祐斗は瞳をしっかり開き、窓に当たる幾つもの水の雫 雨に視線を向けた。

「……………」

雨は窓を容赦なく叩き、次第に強まっていく。外の景色は完全に遮られ、祐斗はふつと表情を曇らせた。

祐斗は雨が嫌いだった。雨は祐斗の心に惨めで荒んだ日々を思い出させるから。

世間の冷たい視線。当然のように繰り返される中傷・誹謗。そんな環境にいた過去があるだけで、まさに生き地獄だ。

しかし、現実はそのような彼を嘲笑うかのように何の救いも齎してはくれない。

今になってみればそれも過去の出来事ではあるが、すぐに忘れられるものでもない。

「おい……おいっ！ 聞いとるのか、君島あー！」

「あ……………」

いつしか回想に浸っていた祐斗は不意に担任に自分の名を呼ばれ、慌てて席を立った。

「……すみません、聞いてませんでした」

言うや気まずそうに祐斗は合わぬ視線をただ宙に漂わせる。担任は途端勘弁してくれと言わんばかりに苦笑を漏らす。

「おいおい、しっかりしろよ。おまえ、今度のテストで80点以上取らなければ追試だぞ」

「……はい」

しかし、普段から予習・復習を怠らない祐斗にとって、テストは取るに足らない問題である。ふと視線を窓際に戻すと、雨脚は先程より明らかに強まっているように思える。

今日は、厄日だ。祐斗はふとそう思った。

そして、そんな彼に心配そうな瞳を向けている者がいた。

廊下側の一番後ろの席に座る女子生徒　肩まである栗色のショートカットと幼い瞳。

「……………」

彼女は祐斗と小学校の頃から同じ学校で、中学まではよく彼と話したりしていた。所謂腐れ縁というやつだ。

しかし、最近は一匹狼を自称する彼の独特のオーラに怯え、まとも

に言葉を交わしていない。

とはいえ、彼女自身は彼を毛嫌いしているわけではないので、どうか話そう話そうとはしているのだが。

時は流れ、休み時間。廊下の隅の窓を鬱陶しげに眺めている祐斗に近づく一つの人影があった。

「……君島君」

不意に名を呼ばれ、祐斗は声のする方に視線を向けた。視線の先には見慣れたショートカットと童顔の少女。

「雨宮か。何、俺に何か用？」

言うや祐斗は再び視線を窓に映す。雨脚は先程よりは弱まっているが、しかしやむ気配は一向にない。

雨宮、と呼ばれた少女は少し俯き加減になると次の瞬間意を決して口を開いた。

「う、うん……君島君、最近なんかボーッとしてるよね。だから、ちょっと気になって」

「……………」

目の前の少女　雨宮透子に祐斗は前々から、極度のお人好しという印象を持っていた。

少なくとも家庭の事情のことで自分から助けを求めたことはないの

だが、彼女は自分から率先して彼の力になろうとする。

それが例えハイリスクなことでも、もはや彼女には関係ない。彼の力になること。それが彼女にとっての喜びであり、幸福だった。

「別に、雨宮が気に掛けるようなことじゃないよ」

「え。」

ふと声を上げる透子を余所に祐斗は窓から視線を逸らさずにきっぱりと言った。

「ただ……嫌いなんだ、雨」

「……………」

祐斗の瞳には今、明らかに嫌悪が浮かんでいた。それが自分に向けられたものではないとわかっていても、

透子はそれに心を痛める。途端、居た堪れなくなつて、透子は極力明るい声を意識して口を開いた。

「そ、そっか……ごめんね、邪魔だったみたいだね。」

「……………」

透子の声はかすかに震えていたが祐斗はそれに何も応えず、ふと窓から視線を外した。やがて、間髪入れずに透子が口を開く。

「それじゃあ……私は、これで。」

そして去り際、「ごめんね、邪魔しちゃって」と付け加え、透子は教室へ戻っていった。

彼女の様子に内心穏やかではなかったが、今の祐斗に彼女のことを気に掛ける余裕は何処にもなかった。

雨宮透子と親しくなったキツカケは、本当に些細なことだった。

小学校二年生の頃、算数の教科書を忘れた祐斗が、当時隣の席だった彼女に見せて貰ったのだ。

当時は今のように一匹狼ではなかったから、祐斗は安易に透子を受け入れた。

そして、それ以来忘れ物をする度に祐斗は彼女に協力を煽った。

始めはあまり良い顔をしなかった彼女だが、いつしか彼の屈託のなさに負け、結局は自分から協力する形となった。

以来、同じクラスになることが重なったのもあり、二人は腐れ縁と言われるまでになるのだが、

高校進学のに祐斗の父、敏彦が病で倒れ、他界すると同時期に祐斗は人との関わりを一切断った。

葬儀やら何やらでゴタゴタがあったのも理由の一つだが、何より世間の目が彼に対して尋常ではないほど冷たかった。

特に関わるうとはせずに、陰ではこそぞ噂話、拳句の果てには陰口を叩く者までいたという。

当時の事情を知っている透子は今まで以上に祐斗を心配するようになった。

両親をなくし、住む場所がなくなった彼に自分の家に来るようにと勧めたが、

祐斗は透子とそこへ両親に迷惑を掛けたくないという理由で、その申し出はキツパリと断った。

しかし、祐斗が人との接触を断ったのはそんなゴタゴタがあったがゆえ、である。

本来なら多少人に迷惑がかかっても居候という形でお世話になることは十分に在り得た。

けれど、その頃の彼は既に人として大きな挫折を経験していたのかもしれない。

「……独りがこんなに辛いなんて、思わなかったな」

祐斗のそのか細い呟きは、やがて鳴り響くチャイムの音に掻き消された。

独りには誰より慣れていたはずだった。しかし今、祐斗は明らかに孤独を感じてしまっている。

何とも情けないことだ。

く 3 ・波紋、拡がりきる頃には、（前書き）

祐斗の憤怒と結衣の涙。それらの意味するものとは一体。  
。

### 3・波紋、拡がりきる頃には

水曜日の放課後。今だ雨は降り続いていた。

B組の結衣は帰りのホームルームが終わるや気づいたように意識を隣のクラス 祐斗のいるA組に向ける。

雨が降っている以上、いつもの場所で彼と会うことは出来ない。昨日の今日では、むしろその方がいいのかもしれない。

しかし、結衣は祐斗の存在を求めている。

昨日、話を最後まで聞けなかったこと。

家に送って貰ったのにちゃんとお礼を言っていなかったこと。

様々な思いが彼女を動かす。

しかし、隣のクラスを覗くと彼の姿はなく、疎らに生徒の姿があるだけだった。

やりきれない思いにかられながら結衣は仕方なくその場を後にした。

そして、昇降口。

「……祐斗さん」

気づいたように結衣が声を上げた。視線の先にはスラッと伸びた背丈にほんの少し儚げな雰囲気を感じた少年。

しかし、彼の様子を気にしてか結衣は少し躊躇った後、下駄箱へ行く靴に履き替えるやそのまま玄関を出て行った。



今は話し掛けられない。普段通りの態度を出来るかすらわからないのに、こんな不安を抱いたまま彼と会話なんて出来ない。

結衣はそう固く決意し、苦渋の表情で姫野学園の校門をくぐり、そのまま大急ぎで自宅までの道のりを走り始めた。

一方、祐斗が校門を出ると今だ止む気配すらない雨に憂鬱な気分になりながら、やがて意を決して前に向き直る。いつまでも下を向いて歩くのはよくない。何より気分が晴れないのだから、そうしたところでその背後には冷たく暗い影しか落とさない。

「っ！？」

と、数メートル進んだところで不意に後ろから抱きつかれるような感覚に襲われ、それに驚いた祐斗は身を翻して自分を掴む人物に瞳を向けた。

「よっ！ 君島。ヤケに暗い顔してるな、何かあったか？」

何だ、この馴れ馴れしさは……とも思ったが、祐斗は自分の体から彼の両手を振り払うとすました顔のまま言った。

「……別に、おまえには関係ないだろ」

祐斗はあからさまに不快な表情を露わにしているが、目の前の男にそれを気にした様子はない。

人懐っこい、というか極端に図々しい人間に出会ってしまったと祐斗は少し頭を痛めたが、間髪いれず口を開く少年。

「なあ……おまえ、最近女の子とよくいるよな？」

敷地内の講堂で……あれ誰なんだ、おまえのコレか？」

言うや少年は自分の右手の小指を立て、祐斗に示した。

小指立ては即ち、”彼女”の意。

結衣とはたまたま居場所が同じなだけで別にそこまで親しい関係ではない。

しかし、祐斗はそれを否定するのも面倒と言わんばかりにその男を睨みつけた。

「うおっ！？ そんな睨むなよ。大体話してる人がいるんだから、それに耳を傾けるのが礼儀ってモンだろ。そう母親から学ばなかったのか？」

「それを言うなら、おまえは初対面の人へのマナーってもんを、学ばなかったらしいな」

やれやれ、と大袈裟にため息をつく祐斗。

先程からの彼の態度にいい加減無視するのも疲れてきていた。

「何言ってるんだよ。俺はおまえと同じクラスの檜山和人。たしかに一度も話してないかもしれないけど、一応クラスメイトだぞ」

言うや男 ひやま かずひと 檜山和人は自分を指さした。

言われてみれば祐斗は目の前の彼の顔に見覚えがある気がした。

「……そうみたいだな。」

「うわっ、ひでえ！」

和人は本来クラスメイトであるはずの祐斗に初対面扱いされたことに非難の声を上げる。

しかし、本気ではなくあからさまにふざけた口調なため、本気で非難しているわけではない。

祐斗は先程から和人の大袈裟なりアクションに苦笑を漏らしていた。自分とは正反対の性格の同級生。それは、最も自分が忌み嫌うはずの存在。

しかし、どうだろう。最初こそ彼にあまりいい印象を抱かなかったものの、

和人と言葉を交わすことはむしろ安らぎすら感じさせるほど穏やかなものになっっていく。

彼の人柄のせいだろうか。小一時間ほど会話を繰り返すと、不思議と次々に紡いでいく彼の言葉に特別深い嫌悪を感じることはなかった。

とある十字路に差し掛かると和人は祐斗に向き直る。

「じゃ、また明日な。祐斗」

「ああ。」

それだけ言葉を交わすと和人は祐斗とは逆方向へ歩き出す。それを見つめながら小さく笑みを零す祐斗。

次に学校で会った時は、今までのように頑なに人を拒むことはしないだろう。

少なくとも彼と話すことにもう抵抗はない。いつしか祐斗は和人に心を開き始めていた。

しかし、それが後にとんでもない事態を引き起こすことになるうとは、予想だになかったのだが。

一方、こちらは場所変わって古風な印象の強いとある家庭。

瓦造りの屋根と家全体をしつかり支えている数本の柱。

庭にはいくつかの竹筒を固定して作られた獅子威しがあり、

水が溢れてはその度に、カコンツ　と良い音を立てる。

やがて、玄関に薄いグレーカラーのセーラー服を着た少女が優雅な表情のまま現れる。

玄関に入るや、少女はほんの小さな声で「ただいま。」と言い、静かに扉を引いた。

「あら。おかえりなさい、結衣。」

「……うん、ただいま。お母さん」

一見して子持ちには見えないほど綺麗でシワ一つない顔立ちと容姿。少女　結衣の母・珠美。彼女は娘の結衣に似てどこか儚げな雰囲気

気を持つ女性だった。

10年前、不慮の事故によりこの世を去った父・神崎和也<sup>かんざき かすや</sup>を心から愛し、現在は生涯独身を心に誓う。それが彼女。事故直後、和也を失った珠美は酷く落ち込んで一時は食事も喉を通らなかったが、彼女には当時幼かった結衣を養うという義務があった。

結衣は小さい頃から大人しく素直な女の子だったが、反面泣き出すと止まらない。

しかし、珠美にとって結衣の存在はまさに天使のようなもので、その泣き顔すら愛しかったという。

つまり、愛娘・結衣の存在が今の珠美を形作っていると言っても、もはや過言ではなかった。

「……元気、ないみたいね。」

母は結衣が真つ直ぐに自分を見ていないことに少し表情を沈めた。

普段、結衣が人と話す時は相手の目を見るが、今は違う。何処か伏目がちで視点もはつきりしていない。

「うん、ごめんなさい……お母さん」

消え入りそうな声で結衣は言った。

母を前にしてもいつも通りの自分でいられない。

そんな自分に齒痒さを感じながら、ふと顔を歪める。

そして、珠美は少し間を置くと、やがてクスツと笑みをもらす。

「……いいのよ、結衣。さあ、早く着替え済ませちゃいなさい。お食事出来たら呼びにいくから、それまで休んでいて……ね？」

「うん……ありがとう」

結衣は母の言葉に頷くとそのまま真つ直ぐ自分の部屋へ向かう。結衣の部屋は階段を上がった二階の突き当たりにある。

小奇麗に整理された和室。壁伝いに背の小さい勉強机があり、部屋の中央には丸い卓袱台がそれぞれ配置されていた。襖を開けると押し入れの上辺には布団、そして下辺に箆笥が収納されており、そこには結衣の私服が納められている。

結衣はセーラーのスカーフを解くとそのまま私服へ着替え始めた。当然の如く、終始結衣の表情はやはり優れない。

やがて着替えが終わると結衣は部屋の窓を開ける。心地良い風が室内に流れ、空気が浄化されていくのを感じながら、不意に瞳を閉じる。

「……………」

いつから、こんなに弱くなったんだろう。

いつしか結衣の心は大きな不安で埋め尽くされていた。

人と話すことでさえ安易に出来ない。そんな自分が悲しくて、やりきれなくて、結衣はそのまましゃがみ込むと自分の膝を抱く。

スウ　と瞳を閉じ、やがてそこから溢れ出した何かが頬を濡らした。

程なくして今度は定期的に嗚咽のようなものが聞こえ始める。

明けて木曜日、祐斗はあからさまに不機嫌だった。その原因は言うまでもなく先日出来た友人　和人である。

「というわけで、君島さん。こちらの書類にサインか印鑑を御願致します。あ、拇印でもいいですよ？」

言うや紙束を祐斗の机の上にドサツと置き、少女はにっこりと微笑んだ。

その紙束の表紙には『君島祐斗に関する個人データ』と記されており、下記に印鑑を押すスペースがある。

恐らく個人情報であろう。名前は既にそのスペースのすぐ脇に書かれており、それが余計祐斗の機嫌を損ねた。

祐斗はこの書類にサインした覚えはない。というより、見ることから今が始めてだ。

にも関わらず、その書類とやらには彼の名義でサインがある。実に摩訶不思議である。

「……おい、和人。おまえだよな？ このヘタクソな字」

「ぎ、ぎくっ！」

すぐ脇に今にも逃げ出しそうな男子生徒　　和人を確認するや、祐斗は彼にヘッドロックをかける。

「ぐっ！　祐斗、ぐるじい！　はな……せ……っ……てえ……！」

「あまり抵抗しない方がいいぞ。余計入るから」

顔を苦痛に歪める和人を余所に祐斗はあくまでにこやかに言った。  
その様子を先ほどからポカンと口を開けて見守っていた少女が口を開く。

「あの……？」

「あ、悪い。えっと……西篠さん、だっけ？」

悪いけど、この話はなかったことにしてくれないか」

「えっ？」

西篠、と呼ばれた少女は祐斗の言葉に思わず声をあげた。

彼女の家　　西篠財閥は地元では有名な富豪でその権力と財力は計り知れない。

この一家に関わるとロクなことがない、という話を祐斗は前もって知っていた。



何でも少女　美奈子は西篠家の一人娘で筋金入りのお嬢様で、一見おしとやかそうに見えて実はとんでもない世間知らずらしく、今も『二人の御学友になる』というのを条件に祐斗の個人情報を入力しようとしていた。しかし、彼女に悪意はない。そこにあるのは、単純な好奇心だけ。

元は和人の目論み　美奈子と親しくなりたいたうただそれだけのために、祐斗は自分の個人情報を半ば強制的に掘り起こされたのである。

そこには当然、他人に知られたくない両親絡みの情報もあるであろう。祐斗はその紙束を無造作に掲げるとそのまま真つ二つに引き裂いた。

「あつ……！　な、何てことをするんですか！？」

そう言つて慌てふためく美奈子を余所に祐斗は引き裂いた紙束を一つにまとめると、すぐさまそれで美奈子の視界を遮った。

「まあ待て。」

「きゃっ……な、何ですか？」

急に目の前が遮られ、少しだけ顔を赤くして声を上げる美奈子。しかし、次に瞳に映つたのは思いのほか真剣な祐斗の顔だった。

「……っていうか、所詮これはコピーだろ。」

これの元となつたデータがあんたの手元にはある。違つか？」

美奈子は祐斗から紙束を受け取るとふと瞳を伏せ、再び祐斗を見た。

「……たしかに、ありますけど。  
でも、それにはあなたのサインがありません」

「……………」

そうやら美奈子はサインのあるなしに拘っているらしい。  
しかし、元々和人が偽装したものゆえ、その価値はないに等しい。

「たとえそうでも、あんたが俺の過去を知っていることに変わりはない。

勝手に人の過去を掘り下げて、本人の知らないところでそれを読み耽る。それがあんたの趣味か」

祐斗はあくまでも荒々しく美奈子に言い放つ。  
対する美奈子は、既に瞳に涙を浮かべていた。

「趣味だなんて、そんな……私はただ、あなたのことが知りたくて……だから！」

「だったら俺に直接声をかけるとか、もっと手っ取り早くて確実な方法が他にもあるだろ。何故こんな手の込んだことをする必要がある？」

人の過去は本人ですら時間をかけて蓋をしてしまいたいものだって存在するんだぞ。      それを土足で入り込んで何が楽しいっ?！」

辛い思い出を人に、しかも自分の知らないところで掘り起こされている事実。

祐斗にとって、それは耐え難い苦痛だった。

「……………うあ……………く……………つ」

祐斗の言葉にすっかり大人しくなった美奈子は引き裂かれた紙束を抱くと

小さく嗚咽を漏らし、そのまま泣き崩れた。

彼女の性格で祐斗の言葉は重すぎる。

一つため息をつくとその肩に手を置き、祐斗は美奈子に視線を合わせた。

それに気づき、和人が声を上げる。

「お、おい……………祐斗？」

しかし、祐斗は小さく首を振ると無言で和人を制する。思わず口籠もる和人。

元はといえば自分の浅はかな行動から始まったことだ。今更交わす言葉さえもない。

「……………悪いけど、俺は行くぞ」

そう言うと祐斗は美奈子の肩から手を離し、そのまま教室を荒々しく出て行く。

それをただ呆然と見送る和人。当然ながら未だ美奈子の涙は止まらない。

重い沈黙が周囲を包む中、和人は気づいたように祐斗の後を追いかけた。

「お、おい、祐斗っ！ ちょっと待てよ！」

その声に気づき、祐斗は不意に足を止めた。声の主は勿論和人である。

「おまえ、あれはちょっと酷なんじゃないか？ 彼女、いいこのお嬢様だぜ」

「なら尚更許せない……人のプライベートを根掘り葉掘り」

「はっ！？ おまえ、一体何言って」

しかし、そこまで言うとな和人はある事に気づいた。

祐斗は今、何かを耐えるようにして唇を震わせていたことに。

「……祐斗。」

驚いた和人はどこか意外そうに声を上げた。祐斗は間髪入れずに口を開く。

「いくらいとこのお嬢様でもやっていいことと悪いことの区別もつかないようじゃ、西篠家も終わりだ」

物事の善悪を見極める力      それが今の美奈子に決定的に欠けているもの。

何せ箱入り娘という意味では折り紙付きの彼女である。それは当然の成り行きと言えた。

「あの様子じゃ彼女、自分を本気で怒ってくれる人すらいらないんだ。何不自由なくぬくぬくと育ってきた美奈子お嬢様と俺じゃ、根本的に人の出来が違う」

昇降口を降り、祐斗はそのまま玄関を抜けた。

和人はふう　と小さくため息をつくと不意に意識を階段上を送った。

ちょうどその頃、美奈子は今だ1年A組の教室で泣き続けていた。涙は止め処なく溢れ、美奈子は途方もなく深い孤独の中にいたのだった。

そして一悶着あった後、祐斗は久方振りに学園の敷地内の教会に足を運んでいた。

そこにはいつもはいるはずの結衣の人影はなく、取り敢えずホッと胸を撫で下ろす。

今は出来るだけ人には会いたくない。

何より会ったところで気分が晴れるとは思えないから。

しかし、そんなささやかな願いは無情にも断ち切られることになる。

軽く数分が経った頃、コツコツコツ　と地面に靴が擦れるような

音がし、

それにつられてそちらに意識を向けてみると、そこには最近見ていなかった顔があった。

「元氣……ないですね。」

「……そうか？」

スツ　と結衣が祐斗の隣に腰を降ろすと、祐斗は前かがみになっていた体を起こす。

「どうかなさったんですか……？」

結衣は心配そうに祐斗の顔を覗き込んだ。

少し間を空けると祐斗はため息混じりに呟く。

「……まあな」

「………」

さすがに結衣もそれで只事ではないと思ったのかふと口を閉ざす。

固唾を飲む結衣。しかし、祐斗は両の指を絡ませると不意に口を開いた。

「……なあ、もし自分が人には知られたくない過去を、

赤の他人に陰で調べられてそれをネタに強請られたら結衣ならどうする？」

「……………へっ？」

突然の話題投下に結衣はただ呆然とするしかない。

しかも話はあまりに非日常的すぎていまいち状況が掴めない。

しかし、祐斗の顔は見るからに真剣でとても冗談で言っているとは思えなかった。

「それが……あなたの今の状況なんですか？」

「ま、簡潔に言えばそういうことだ」

西篠家のお嬢様である美奈子の御学友になるためだけに過去を売らねばならない。

勿論、直接的な強請りではないが、祐斗にとってはそれが一番しくりくる表現だった。

「……はあ」

が、いまいち実感が湧かない結衣。

それを余所に祐斗は小さく苦笑を浮かべた。

「悪いな、わかりづらくて」

「えっ？」

きよとんとする結衣。自嘲的な笑みを漏らすと祐斗が再び口を開く。

「いや、おまえの顔がそう言ってるから」

「……あ、すみません」

祐斗の言葉が府に落ちたのか結衣は申し訳なさそうに顔を伏せる。しかし、実際は謝罪するほどの悪いことはしていないはずだった。

祐斗が再び苦笑する。

「だから、すぐに謝るなよ。別に特別癪に障ったわけじゃない。ただ単に自分の陥った状況が他人からしたら極端にわかり辛いっただけだ」

実際、これ以上心配かけまいと事実をありのままに話そうとしたが、結衣はすぐに理解するには至らなかった。

勿論そこには自分の言葉が足らなかったという理由も大いにあるが、元々言葉だけではいまいち説明力に欠ける。

「えーっと……つまり、過去の情報をネタに、あなたは……その、強請られたと？」

恐る恐る問う結衣。しかし、その答えは意外とすんなりと返ってきた。

「いや、実際はどっかの世間知らずのお嬢様の御学友になるのを条件に

つい先日知り合ったばかりのどっかの阿呆に自分の過去を売られただけだ」

「成る程、少し会わない間にそんなことが……」

祐斗が結衣に事の経緯のすべてを告げると、結衣はやがて納得した



ような声を上げた。

たしかに彼の体験談は先の問いかけの内容に深く関連している。すぐにはわからなかったのはやはり祐斗の説明不足からだった。

「ああ……困ったものさ。ただでさえ、毎日憂鬱に暮らしていたのにそれに拍車をかけるようにどっかの物好きなお嬢様の”検問”に引っ掛かっちゃまったんだからな」

人の過去を引きずり出して、それをネタに金持ちお嬢様の御学友になれなんてどう考えてもまともな展開ではない。

それは、自分の過去を売るだけで地元でも有数の権力と財力を持つ西篠財閥のご令嬢と関わりを持てるのなら安いものだと思う者もあるかもしれない。

しかし、少なくとも祐斗には美奈子の存在などどうでもよかった。特別気になっているわけでも、まして好意を持っているわけでもないのだ。

「それは、大変でしたね……でも、その西篠財閥のご令嬢　美奈子さんでしたか」

「ああ」

結衣は祐斗に西篠美奈子の名を再確認するとおもむろに口を開いた。

「……彼女、それだけあなたのことが気になっていたんだと思います」

「ええ？まさか」

意外そうに言う祐斗。

「だって祐 …… いえ、君島さん、結構学年でも評判いいですから」

下の名前で呼ぶのがしっくりこないと感じたのか結衣は敢えて苗字で祐斗の名を口にした。

勿論その中には、彼の”隠れファン”の女子たちへの負い目というものもある。

実際、祐斗は常に少々近寄りがたい雰囲気を湛えてはいるが、とても整った顔立ちをしていて学園内でも”隠れファン”が結構いるらしい。

何でも、幼い顔立ちに宿る憂いを帯びた瞳がたまらないのだとか。

しかし、結衣は少し前から祐斗と仲良くしていて、その頃からクラスメイトや同級生の視線が厳しくなり始めたことに気づいた。それは所謂、嫉妬という一つの感情の現れであり、その負い目が彼女を講堂前のベンチへ足を運ばせなかったことさえある。

そして、最近本格的に結衣の学園での評判はガタ落ちしていた。特に、女子生徒の間からは。

「……だから、このように権力で過去を掘り返す人間が出てきても仕方が無い、と?」

少し間を開けると、呼び名が変わったことに多少怪訝しながらも祐

斗は結衣に問い返す。

「あ……勿論、人の過去を勝手に調べることはいけないとは思っています。」

君島さんと同じことを私がされたら、きっと辛くて耐えられなかったと思いますから」

気づいたように結衣は言葉を付け足した。

結衣にも幼稚園の頃に父を亡くしたという記憶がある。それを人に知られ、それをネタに理不尽にも自分が学友になることを勧められたら、いくら相手が財閥の御曹司でも嫌悪を露わにするに違いない。

やがて暫しの沈黙が訪れ、周囲に異様な雰囲気 が漂い始めた。別に不快というわけではない。

秋風と相俟って、本来ならば心地良いのだろう。しかし今の祐斗にとってはあまり良いものではなかった。

「…それで、これからどうされるんですか…?」

「どうするもこうするも、俺に出来ることなんかないだろ」

祐斗は財閥のお嬢様が相手では何を言おうが無駄だと思った。育ちが違うのに何故意見を共通させることが出来るか。

「そうでしょうか…私には、君島さんは現実から逃げているだけのように入えます。」

……出来ることは……いえ、君島さんにしか出来ないことは、きつとあります。」

「……………」

そうかもしれない。実際、既に美奈子相手に一通りの弁明は済んだ。そして、彼女からそれを否定する言葉は聞こえなかった。いや、正しくは否定出来なかったのだろう。温室育ちのお嬢様に捻くれ者の祐斗の言葉を否定するだけの知識と精神力はない。

しかし、だからと言って今のままでは何処か胸のう치가スッキリしないのも事実だ。

もう一度会って話の一つでも出来れば、もしかしたら和解のキツカケが出来るかもしれないが。

「ごめんなさい、ナマイキを言ってしまったけど、でも、美奈子さんはきつと、あなたが思うほど悪い女の子ではないはずです」

わかってる。祐斗とて彼女に悪意がないのは百も承知だ。しかし、自分のされた事を思えば、それは気休めにもならない。

祐斗は一つ小さな溜息をつくと不意に空を見上げた。

いつもと変わらない空。しかし、そこには肝心な何かが欠けていた。

一方ちようどその頃、校舎には一つの影があった。

ショートカットの少女。意外なことに、雨宮透子だった。

実は先日から祐斗の心配をしていた透子はふと視線を送った先に学園一の美少女と名高い神崎結衣の姿があることに驚き、その隣に普段は一匹狼を貫いているはずの祐斗が特に拒絶反応も見せず、結衣と親しげに話をしているのに動揺を隠せなかった。

ついさつき、檜山和人が西篠美奈子に祐斗の個人情報を買っていたことは透子も廊下から漏れ聞いていたために知っている。

そして、祐斗が凄じ剣幕ではば初対面のはずの美奈子を怒鳴りつけ、明らかに嫌悪を露わにしていたのも見ていた。

そんな最悪の状態の彼と共にいて拒絶されず、しかも祐斗の顔には今笑みさえ浮かんでいる。

この時、透子は君島祐斗と神崎結衣が同じ姫野学園高等部一年の同級生という、

ただのありふれた関係でないことを初めて思い知らされた気がした。

く4・交わされる言葉は如何な戯曲か（前書き）

透子と遙。そして、祐斗と和人。それぞれの想いがそれぞれ違った形の旋律を奏でる。それは不協和音が、それとも協和音たりえるのか。

#### く 4 . 交わされる言葉は如何な戯曲か

その日の夜。

女の子らしい優しい色彩の壁紙に可愛いデザインの小物類が数多く飾られている雨宮透子の私室で、

透子はコードレスフォンを手にしながらベッドの上で膝を抱えていた。その顔は、やはり優れない。

『 そう。ユウがあのお崎さんと』

「うん……」

ユウ、とは勿論祐斗の事だ。

電話の相手は透子の中学校の頃からの親友、おおすみ はるか大隈遥。そのハスキーな声と活発な性格はクラスでも人気を博している。

高校に上がってから透子とクラスは違えど、前と変わらず仲良く過ごしている。それは時々ケンカはするが、それも仲のいい証拠。

『 話には聞いていたけど、そこまで彼が心を許すのってやっぱり重大よね。特にアンタには』

祐斗と結衣の噂は学内でも有名でそれは当然遥の耳にも聞こえてきていた。

しかし、一匹狼を自称する祐斗の胸の内に秘められた孤独。

それを少しずつとはいえ浄化している結衣は今、彼にとってもとても重要な役割の中にいる。

しかし、だからこそそこが問題なのだ。

「……別に、私は」

『バカ、そこで強がるんじゃないよ』

透子の声を遥は間髪入れず遮った。想い人の想う相手がどんなに強敵でも、そこで諦めれば恋はその瞬間、儚くも朽ち果てる。

確かに結衣は美少女で、同時に人を包み込むような包容力を兼ね備えているかもしれない。しかし、だからと言ってただ諦めてしまうのは釈だろう。

『今、彼の事情に一番通じてるのは、他でもないアンタなんだよ？』

そりゃ、たしかに神崎さんは美人だし頭もいいしで学内ではそれなりに人気があるかもしれない。

でも、元を正せば透子には神崎さん以上にユウとの面識がある。それを無に返すワケ？』

透子は祐斗と小学校低学年からの付き合いだった。高校に上がってから彼と出会った結衣とは根本的に過ごしてきた時間が違う。

しかし、出会った当初透子は祐斗とあまり親しくはなかった。それは初めから親しみを持てるはずはないが、だったら今の結衣はどうか。

出会って間もない頃、透子は彼とすぐには親しくなれなかった。環境が違うというのもあるだろうが、それにしても結衣のケースは特異すぎる。



幼い頃に母親が他界して、高校上がる直前に父親まで亡くして、それ以来世間の冷たい視線に耐えながら祐斗は一体何を思ったのだろうか。

どんなに苦しくても、どんなに辛くても自ら周囲の人間に助けを求めることは出来ない。その前に、祐斗はちょっとした人間不信に陥っていたのだから。

透子だって何度も彼を助けようと思った。しかし、幾度となく祐斗はその協力を拒み、自分に素っ気無く接するだけ。この前の休み時間の時ように。

『透子が勇気を出せないでいる理由、あたしわかるよ。少し前までは親しかつたのに急に余所余所しくされちゃ、誰だって堪えるさ』

「始めは何とかしようと思った。でも、私じゃダメだったの。……私じゃ、神崎さんみたいに彼の支えにはなれなかったんだ」

透子は痛感していた。自分が無力であること。そして、結衣になら祐斗の力になってあげられることを。

いくら望んでも透子に結衣のような包容力はない。祐斗の心の傷を一番癒してやれるのは自分ではない。結衣なのだ。

『透子、あんまりあたしに心配させないでよね。もしアンタがボロボロに傷ついたとしたって、あたしはアンタを本気で責めることなんか出来ないんだから』

中学時代の負い目もあるし、それでなくても透子はすぐに何かと追いつめてしまう性分なのだ。

遥は例え透子が自分の命を自ら絶とうとしてももはや安易にそれを止めることは出来ないだろうと思った。

もし軽はずみな言葉を並べたとしても、それは透子の心には響かない。

逆に言えば、それが悪い意味での引き金となる可能性すらある。

そもそも遥が透子に出会った中学当時、遥はクラスで一人浮いていた。

逆に透子は持ち前の明るさで周囲を賑わすムードメーカー。

そんな二人がこうして高校に上がった頃にはすっかり親友同士になっ  
ていることなど、その時は一体誰が想像しただろうか。

かつて遥は学校が嫌いだった。日々の授業は殆ど寝て過ごし、休み  
時間になるとそのまま担任の許可なく早退したことさえある。  
出席日数の関係でまた登校してきてもやはり普段の態度は変わらず、  
相変わらず不良のお手本とすら言われていたほどその生活態度は悪  
かった。

しかし、そんなある日、PTAでそのことが問題になった。  
つまりは、ある生徒の親が遥の存在自体を問題視したのである。

あの子の生活態度には目に余るものがある。このままあの生徒の行  
動を許しては周りの子供達にも害が及ぶのも時間の問題だ。

その親の言い分はこうだった。しかしそんな風に言われることに遥  
は何の感情も湧いてはこなかった。

しかし、一つだけ気に掛かることがある。

それは遙が自宅謹慎を言い渡される三日ほど前、いつも通り遙が昼前に早退しようとしていた時、それを遮るようにある一人の少女が現れた。

当時クラス委員だった透子である。

その時はちょうど祐斗とも仲が良く、透子は毎日笑顔を絶やさず暮らしていた。

大好きな人と一緒にいられる幸せ。女の子ならこれ以上の幸福はないと言える。

しかし、そんな中でいつも遙の存在は何処か気にかかり、それは例え祐斗と話をしていた時であっても変わらなかった。

大隈遥。何処か鋭い、しかし寂しげな瞳を持ち、同級生とは思えないほど大人びた容姿をした女の子。憂いの帯びた表情は、若干の祐斗と被る。

これで生活態度さえまともなら人気が出て何らおかしくはなかっただろうに。現実はそのような甘い幻想を嘲笑うかのように冷たい不協和音を奏でた。

「……何の用」

中学校の校門前、追いかけてきた透子に遙が言った。

その顔は透子からは見えないが明らかに嫌悪が浮かんでいることだろう。

「何の用って……まだ授業終わってないよ。大隈さん、帰っちゃダメだよ」

「関係ない」

言うや透子を振り切り、そのまま校門を出て行くこととする遙。しかし、透子は慌てて遙の目の前に立ちはだかった。

クラス委員の義務という問題も勿論ある。しかし、何より透子は心から遙のことを心配している。それだけは確かだった。

この頃、既に一部のPTAが遙の生活態度を懸念し、クラス委員である透子は彼女を説得するように担任から言われていた。

実際このままでは学校を追いつ出される。義務教育ということから最悪退学という事はないが、これからの事を思えば安易に遙を家に帰す訳にはいかなかった。

「関係なくないよ！知らないの？大隈さん、PTAの人達に問題視されてるんだよ。」

ううん、それだけじゃない。このままじゃ大隈さん、学校から追いつ出されてこの町からも」

「それなら逆に清々するさ」

その言葉に透子は息をのんだ。冷たい声音。何処か闇のあるいでたち。

「元々この町にはあたしの居場所なんかなかったんだ。それなら、退学だろうが停学だろうが痛くも痒くもないね」

その頃の遙には世間体など関係なかった。もし自分の態度のせいで学校に居られなくなっても然程問題視する程のことではない。

遙はそう言うや透子を遮って校舎を後にする。透子は心の何処かで歯痒さを感じながら、やがて気づいたように声を上げた。

「待つて！ 待つてるから。私、大隈さんのこと、ずっと待つてるから！！」

何てお人好しなんだ。遙は背中に投げかけられた言葉に苦笑しながらも心の何処かで何とも言えないやりきれなさを感じた自分の居場所はない。そう決め込んで普段学校にいても然程真面目には暮らしてこなかった。しかし、実際は違ったのかもしれない。

自ら自分の居場所を見つけようとしなかった。だから居場所がなかった。

それだけの話だ。しかし、今更それに気づいたところで後の祭りではない。

しかし、数日後遙にとって驚くべき事が起こった。あれほど問題視されていたにも関わらず、遙は学校を追い出されなかったのだ。

話を聞こうと放課後、クラス委員の仕事をしていた透子を無理矢理屋上に連れて行くと透子は不思議そうに遙の顔を見つめた。

「どうしたの？ 大隈さん」

「どうしたの、じゃないだろ！ なんであたし、ここに居られるん

だ……？

……いや、この際そんなことどうだっていい。アンタ、一体何したんだよ！」

遥は透子が何か根回しをしたのではないかと踏んだ。本来PTAという人種は人の話を聞かないのが普通だ。

そんな連中を相手に、透子は何をして自分を学校に居られるようにしてくれたか。その手間は計り知れない。

しかし、透子は相変わらず屈託のない笑みを浮かべると呆気羅漢と言った。

「大隈さんの居場所は既にここにある。もしなかったとしても、これから作っていくことも出来るじゃない。

そんな簡単に”清々する”なんて言っちゃダメだよ。少なくとも私は、大隈さんがいなくなったら寂しいと思うもん」

「……アンタ」

驚いて透子を見つめる遥に透子は小さく首を横に振った。

「私は雨宮透子。呼ぶ時は透子でいいよ」

遥は今まで数多の笑顔を見てきたが、透子ほど自分の心を落ち着ける笑顔はないと思った。

つい先日まで学校に何の末練もないと自分に言い聞かせていた。そして、それが事実だと思ってた。

「……わかった。なら、あたしのことは遥って呼んでくれ」

「ホントに！？ わぁ……ありがと、遙っ」

しかし、少なくとも透子がいれば学校も案外捨てたモノではないかもしれない。

学校が嫌いなのは変わらないけれど、このまま学校に通うのも悪くはない。

その時から遙はそれなりに真面目に日々を過ごす事を決意した。

「それじゃ、透子。早速だけど今日一緒に帰らないか？」

「え、勿論大歓迎だよ！……あ、でも、クラス委員の仕事が残ってるから、少しだけ校門で待っていてくれるかな？　すぐ行くから」

「ああ、いいよ。さっさと済ませといで。実はあたし、めっさ腹減ってたんだ」

「ふふ……わかった。帰りに一緒に何か食べて帰ろうね」

「透子の奢りな」

「ダメ！　割り勘だよ、割り勘っ」

「ちえっ」

そんなこんなで透子と遙の絆は今になっても色褪せないまま残っている。

今になってみれば立場が逆転しているような気がしないでもないが、

それは二人にとって然程気になることではなかった。

親友の変わらない笑顔。互いにとってそれが何よりも幸せだったから。

「…………ごめんね、遥。急に電話しちゃって」

『だからそういうことは気にしないの。友達でしょ？』

「…………うん」

透子は涙で腫れた眼を擦ると遥の言葉に小さく笑みを漏らした。

遥は変わった。最初の頃は取っ付き難い印象を受けていたが、今は素っ気無さの中にも確かな優しさがある。

遥は本当に心から透子の事を心配しているのだ。だからこそ、これ以上心配はかけられないと透子は感謝を込めて微笑む。

「ありがとう。それじゃ、そろそろ切るね」

『今日はゆつくり休みなよ』

「うん、そうする」

『よし。それじゃ、おやすみ』

「ふふ…………おやすみなさい」

プチッ。電話が切れると透子はコードレスフォンを枕元に戻し、そ



のままベッドから降りる。

そして、ふと視線が机の上の写真立てに向かい、透子は少し間を開けると、クスツと今一度笑みを漏らした。

写真は中学の頃に遙や祐斗と教室で撮ったものだった。自分の右には遙、左には祐斗がいる。

どう足掻いても過去には戻れない。だったら、多少冒険してでもこれから先の未来に向かうだけだ。

同じ頃、とあるマンションの一室にも一本の電話が入っていた。小奇麗に整理されたクラシッくな空間。 君島祐斗の部屋だ。

しかし、こちらは相手が友人の類ではないのかあからさまに嫌そうな顔をしていた。

「それで、御用は？」

『だから、本当に悪かったと思ってるって！ いい加減機嫌直してくれよ』

用件は今日の昼間の事だった。和人は人懐っこい性格でクラスでは誰からも好かれる人気者らしいが、だからといって今回の事を安易に許せはしない。もしそれをすれば、和人の行動を認めるようなものだ。

『あれから、俺も色々考えたんだ。オマエが両親を失って、周りか

ら蔑まれて毎日どんな気持ちでいたか』

「……………」

どうやら和人も祐斗の過去を知っているらしい。考えてみれば当然かもしれないが。

何せ直接美奈子と交渉したのは他でもない和人なのだ。そして、その書類には”和人の字で”祐斗のサインがあった。

興味本位でその中を覗いたとしても何ら不思議はないだろう。故に、祐斗も然程驚きはしなかった。      ただし苛立っただけで。

『俺には両親もいるし、すぐそばにはいつも元気な妹や弟達もいる。どんなに考えてもオマエの苦しみを、俺は100%知ることとは出来ないかもしれない』

「当たり前だ」

今回の件に関して環境の違いは大きい。いくら想像で相手の事情を把握しようとしても所詮それは想像でしかない。

実際、真実を知るのは本人のみで、本人が自分から直接話す気がなければもはやこの問題は誰にも手出し出来ない。

『わかってるって、取り敢えず聞けよ。      でも、俺は今回の件で思い知らされたんだ。』

自分の軽率な行動は確実にオマエの負担になってる。俺が許されないのも仕方ないってな』

それなりに理に適っている意見だ。和人は案外物分りがいいのかもしれない。

しかし、くどいようだが、だからといって彼を許せる理由にはならない。

『だから、最悪俺は許されなくてもいい。ただな　西篠さんだけは許してやってくれねえか？』

「は？」

祐斗はいまいち事態が呑み込めずあからさまに怪訝した。

しかし、話を聞いてみると段々その言葉の背景が明確になっていく。

『彼女、あの後ずっと教室で泣いてたの、俺見ちまったんだ』

「……………」

『確かにオマエの言う通り、彼女には自分を本気で怒ってくれる人はいなかったかもしれない。』

でも、だからこそ彼女にはオマエの態度が相当堪えてたんだ。それ程のダメージ　お前にわかるか？』

わかってる。自分でも今日の自分の態度が女の子に対するものにしてはあまりにも酷だと思った。

しかし、あの場で怒りを発散しなければ今頃彼女は尚も自分のしたこと残酷さに気づかなかっただろう。

人の過去を無理矢理引き出し、拳句それをちらつかせて自分との関係を築かせようなど正気の性とは思えない。

そもそも、そんなことをして友達という名の関係が本当に形成されるだろうか。当然答えはNOだろう。

「わかってるさ」

「ん？」

「彼女に悪気がなかったことも、俺の態度があまりに過剰すぎていたこともわかってる。

でも、だからって安易に許せるものでもないんだ。」

「……………」

「過去は俺にとって戒めの鎖だ。受けた傷が大きいほど人は臆病になって

その先の未来を生きる気力がなくなる。そういう意味では彼女も俺と同じなんだろう」

今、美奈子は精神的にかなり滅入っている。

そして、その傷はすぐには回復するものではない。

「かつての俺は過去を思い出すとその後の数日は、その後遺症に悩まされた。

……いつそ、自分で自分の喉をカッ切ってしまいたい気分になるよ」

息の根を自分で止めてしまえばこの苦しみからは解放される。

しかし、それは同時に生の終わりを意味する。

ゆえにそれはそう簡単に出来るものでもなかった。

『祐斗。』

その張り詰めた一言に祐斗は一瞬目を真ん丸くするとやがて一笑する。

「安心しろ。今は自殺願望なんかないから」

『……ならいいけど。』

自分の軽率な行動が元とはいえ、このまま自殺でもされたら後味が悪すぎる。和人は本当に安心したように一つ息をついた。

『それで？ オマエ、これからどうするんだ』

「……フツ」

『？ おい、何笑ってんだよ。祐斗』

和人は祐斗の反応に怪訝し声のトーンがやや下がった。

祐斗は少しの間笑みを漏らすとやがて落ち着いたところで改めて口を開く。

「いや。オマエ、結衣と同じ事聞くんだなと思って」

『は？』

「アイツも今日言ってた。「これからどうするんですか？」って。」

『……そりゃ、オマエのことが心配だからだろ。』

そういう意味では、俺は神崎さんと同じ気持ちだぜ』

「わかってるよ。美奈子お嬢様とはいずれ機会があれば話し合う。もつとも、あちら側にその気がなけりゃ、水掛け論で終わるだけだな」

話し合いとは本来双方が真正面から向き合って初めて成立する。

もし片方が真剣でも、もう片方に真剣さが足りなければそれは話し合い足り得ない。

否。真剣さ、ではなく強いて言うなら相手を理解しようとする心意気だろうか。

『その心配はないぞ』

「ん？」

『……彼女も、オマエに謝りたいって言ってた。』

それは今日の放課後。祐斗が教会前のベンチに向かっていた時、和人はやはり美奈子が気になって改めて階段を駆け上がった。

案の定、教室の中からは泣きじゃくる声が聞こえ、覗いてみるとそこには未だ悲しみに打ちひしがれている西篠美奈子の姿があった。

その風貌たるや財閥のお嬢様には見えない。強いていうならば、たった一人放課後の教室で泣きじゃくる”西篠美奈子”という名の女の子。

いくら泣いても涙は止め処なく溢れてくるようで、それが自分の言葉で止められるとは思っていない。

が、だからといってこのまま黙って帰るわけにはいかないと和人は意を決して教室へ入っていく。

元とはいえ自分の軽率な行動が引き起こした結果なのだし、和人には目の前の現実には何かしらのケジメをつけなくてはいけなかった。

「！　あなたは……」

「こうして面と向かって話すのは初めてだな。　檜山和人。　祐斗のダチだ」

本来ならば祐斗の友達を自称する資格はないのかもしれない。和人は知り合いの情報屋に頼んで祐斗の個人情報を入手したのだが、今思えば、それは限りなく愚かな行為だった。それが原因で少しづつ仲良くなっていた祐斗を怒らせ、拳句美奈子まで悲しませてしまったのだから。

「……君島さんは？」

「帰った。もう、学内にもいない」

「そうですか」

美奈子はその答えに目に見えて落胆し、間髪入れずに再び嗚咽を漏らした。

本当はちょうどその頃、祐斗はいつもの教会前のベンチにいたが、

それを話したところで何にもならないだろうと和人は敢えてそのことを伝えなかった。

「……私……わたし、これからどうすればいいんでしょう……」

「え……」

「……君島さんとはもう、お話をするどころか、普通にお会いすることも……出来そうもありません」

「……」

美奈子は何処までも祐斗しか見ていない。

不純な動機がきっかけとはいえ美奈子の存在を少しずつ特別なものと認識していた和人はそれに少なからずショックを受けた。

そもそも、祐斗にあれだけの屈辱を与えてなお、彼女を想う資格はないのかもしれない。

がしかし、このまま彼女を放っておくことは和人には出来そうもなかった。

「たしかに、君は　いや、俺達は取り返しのつかないことをしてしまったのかもしれない。

実のところ俺だって祐斗が怒る気持ちもわからなくはない」

「……辛い過去だから、忘れない過去だから……君島さんはそれを知られて傷ついた」

こくり、と和人が美奈子の感情のないその言葉に頷く。



「でも、祐斗がどれほど深い傷を負っていたとしても、それを受け止められる人がいれば、そう簡単に傷は開かない」

「！ まさか……彼には今、過去の傷を話せる相手がいなくても？ だって、あなたは彼の御学友で……」

しかし、和人は苦痛な表情のまま首を横に振る。

「本来は然程親しくも無いんだ、俺達」

「……………」

「それに……もしアイツに過去の傷を洗い浚い話せる相手がいても、そのすべてを受け止めるには並の精神力ではとても無理だ。

その上、その傷を俺が半ば無理矢理に掘り起こしちゃった。結果、アイツの傷は当初の倍かそれ以上に膨れ上がってる。

目の前の現実には当然の成り行きだよ」

祐斗の心の傷。それは過去の記憶だけではなく、和人と美奈子の行動によって今確実に深くなっている。

こればかりはいくら結衣でも癒すことは難しいだろう。

事の深刻さを初めて知った美奈子は思わず言葉を失った。

温室育ちである美奈子にもやはりそれ相応の感受性があつた。現実の想いを寄せる相手を自分の手で傷つけてしまったのだ。

「私……どうしたら……」

呆然としながら呟く美奈子。

もう、どうしていいかわからなかった。今日まで生きてきて、美奈子にはこれほど複雑な現実に向面したことはない。

祐斗の言うように、何不自由なくすくすくと育ってきたのだ。だからこそ現状に立ち向かう意志を即座に持てるわけがなかった。

「簡単だよ」

「え……？」

そうあっさりと言つてのける和人を驚いて見つめる美奈子。  
しかし、和人の顔には彼独特の人懐っこい笑みが浮かんでいる。

「君が誠意を持って祐斗に謝ればいい。

勿論、俺もそうする。……一緒にアイツに謝ろう」

「……はい」

再び現在。

『へえ……オマエって、結構マメなのな』

「茶化すなつて。俺だって本当に悪いと思つてゐるんだから」

和人の部屋。祐斗のマンションとは違い、二階建ての一軒家で家族で住んでいるためそれなりに広い。

机の脇には趣味でやっているアコースティックギターがあり、よく

見ると本棚にはギタースコアが数多く納まっていた。

『わかってる。これ以上ツンツンするのも嫌だし、今回の事は許してやるよ。』

「おお、祐斗大明神様！ 有難き幸せっ」

そう言っ大袈裟に歓喜の声を上げる和人。

勿論本音だ。これ以上祐斗と険悪になるのは嫌だったし、何より自分なりに彼と仲良くしたかった。

それが自分が犯してしまった罪に対する償いだ。

そして、自分の想い人 美奈子を苦しめた自分に対する、せめてもの慈悲でもある。

『ばーか。気持ち悪いこと言ってんな』

「失敬な！ これでも俺は本気と書いてマジだぞ」

『んな、下らない弁明はいいから』

和人は繰り返される祐斗の言葉にそつと胸を撫で下ろした。どうやら本当に許してくれたようだ。

「 兎に角、西篠さんのことは俺が仲介に入ってやるから、ちゃんと許してやれよ」

『ああ、了解した。……しかし、和人。あの美奈子お嬢様の何処がそんなにいいんだ？』

祐斗の心にふと浮かんだ疑問。しかし和人は意外とあっさりとそれに答えた。

「全部。全て。英語で言っとオール」

まさに間髪入れずだ。和人の想い人が美奈子であることは先ほどの回想の説明で既に言っている。故にこれ以上黙っていることもなかった。

『アホ、んなはつきり言うな。聞いてるこっちが恥ずかしい』

「へへっ」

苦笑する祐斗を余所に和人は本当に嬉しそうに微笑んでいた。これで明日、美奈子と祐斗の間に生まれた亀裂が修整出来れば何も言うことはない。

しかし、そう簡単にいくだろうか。

同時刻、姫野市の中でも一際その存在感を持つある建築物。ある有名な設計士が設計したその豪邸こそが西篠財閥の本拠地。西篠邸だ。

東京ドーム一個分はあろうかという広さの敷地内に屋敷と別館室内プールなどの施設が建ち並び、明らかに常人の住む世界とは異質の空気が漂っていた。

夕刻を過ぎ、周囲が暗くなったせいも多少はあるだろうが、元々敷地が広すぎるというのも間違いない理由の一つとして挙げられる。何せ庭に生えている草木は一部を除きほぼ全て海外から取り寄せたものが植えられているのだ。常人の住む世界ではないのは一目瞭然である。

そんな中、一人の少女が庭の人工芝を歩きながら、そっと池の前に立ち止まった。

フリルの沢山ついた上品なドレス風の寝間着を着ている美奈子だった。しかし、その視点は何処を見る訳でもなく宙を漂っている。

美奈子は今、ある日の回想に浸っていた。

今年の四月 私立姫野学園の入学式の日、美奈子は同級生の中に自分と同じ年とは思えないほど大人びた少年の姿を見つけた。

少年は何処か鬱陶しそうに周囲の何処にも視点を合わせず何となしに宙を見つめ、かと思えば制服のポケットに手をつ込みながらそのまま何処かへ行ってしまった。

美奈子は初めて見た時から少年のミステリアスな雰囲気惹かれ、何度か声をかけようとしたが箱入り娘の彼女にそんな勇気があるはずもなく、日々は刻々と過ぎていく。

今日のような夜を重ねる度、脳裏に浮かぶ少年の暗い瞳が美奈子には何処か艶かしく感じられ、それがたまらなく心地良かった。

今思えば、今までずっと屋敷に籠りがちだった美奈子にとって、それが”遅すぎる初恋”だったのかもしれない。

そっと自分の胸を抱く美奈子。すると、胸に確かに感じる痛み。や

がて耐えられなくなつてふとその場にしゃがみ込む。

「……………く……………っ」

辛い。今まで約16年間生きてきて感じたことのない圧迫感に、美奈子は必死になつて耐えていた。

元はといえば自分の軽率な行動から起こつた事だ。今更逃げられるものでも、まして無かつた事にすることも出来ない。

密かに好意を寄せる相手の情報　美奈子が和人を通じて入手した君島祐斗の暗く閉ざされた過去。  
彼の瞳に浮かぶ闇が発生したまさにその瞬間をも垣間見ることが出来る細かな個人データ。

実のところ、それを入手したいと思つたのは必ずしも彼女の意思という訳ではない。

ある日、自宅の庭でいつになくボツツとしていた美奈子を、彼女の父親である西篠禎治氏（さいしやうていはる）が声を掛けた。

最初はもたついて理由を言い出せなかつた美奈子だが、このままだボツツとしていても仕方がないと勇気を出して事の経緯を告げた。

高校の入学式当時から気になる異性が出来たこと。  
そして、日を重なる毎にその少年の顔ばかり脳裏に浮かべてしまっていること。

禎治は最初怪訝そうにしていたが、やがて何かを閃いたのか意味あ

りげに口元に笑みを浮かべ、美奈子にこんな言葉を投げかけた。

『ならば、彼の個人情報入手すればいいのではないか？  
さすれば悩みも少しは晴れよう。私に任せておきなさい』

結果として、その言葉が美奈子暴走の引き金となってしまったわけだが。

何故和人に情報リークの矛先が向いたかといえば、西篠財閥の現当主である禎治は立场上姫野市内の住民情報に少し通じており、例えばある人物を探したいという依頼があれば今、市内の何処に住んでいるかまたその場所には今何人で住んでいるのか等、短時間であらゆる情報を得る事が出来、檜山和人は其中でも美奈子と同学年であるし、知り合いに裏業界でそこそこの名のある情報屋がいることもわかっていたからだった。

個人情報の売買はお世辞にも良い商売とは言いが、学園内ですれらを誰にも見られずに受け取る時間は十分あるだろう。

実際、美奈子は和人から君島祐斗の個人データを誰にも見られる事なく入手した。

そして、数日経ち、過去をちらつかせることで祐斗の近い存在になることを望んだ。

しかし、ハタから見れば非常識で失礼極まりない事と知らずに美奈子はそれに気づかない。

というより、気づける材料がないと形容した方がよりしっくりくるだろうか。  
繰り返すが彼女は折り紙付きの箱入り娘だ。

もし好きな人が出来ても声をかける勇氣さえなく、かといって遠くから彼の姿を見守っているだけではあまりに辛すぎる。

もっとも、このような結果になるくらいならそうした方が幾分ラクだったかもしれないが、彼女にそれを自覚出来るだけの経験はない。

それならいつそ、彼自身の情報を手に入れてそれで彼の事を知った上で、“御学友”という形で祐斗とお付き合いを始めたかった。

それが美奈子の本音だ。しかし、現状はあまりにも複雑で、彼女は今になって自分の身を蝕む“何か”の存在に気がついた。

その“何か”さえなければ、美奈子は明日勇氣を出して迷わず祐斗に謝罪が出来たかもしれない。

しかし、その“何か”を生み出したのは間違いなく軽率な美奈子自身の行動であるのも確かだった。

逃げられない現実。いくら時間を重ねて、いくら無い頭をフル回転させても現状は一向に覆せるレベルにはならない。

次第に生まれる焦り。悲しみ。虚無感。美奈子はそんな感情を胸に秘めたまま、今夜の庭を佇んでいたのだった。

明けて金曜日。姫野学園は些か騒がしかった。来月の十一月四日には秋の学園祭を控えており、今日は授業が終わるとその準備に大新波だった。

学園祭は毎年各学年・各クラスでそれぞれ思考を凝らした出し物を用意し、外来にも十分喜ばれるような雰囲気作りを心掛けており、今年は学園の敷地内に様々な出店を並べたり、教会の前で吹奏楽部





るぶつきらばうだが暖かな言動は彼の人柄を表す。

祐斗は和人と小一時間しか話していなかったにも関わらず彼に気を許した数日前の自身を思い返し、その理由がやっと府に落ちた。

出会いが最悪なだけに最初は然程気にしていなかったが、檜山和人の天性の楽天主義と仁徳溢れる行動はまさに称賛。

それは、彼も人間故にかつたるいと思う事もあるだろう。しかし、だからといって普段の彼の人柄を無に返せるものではない。

「それでは、今決めた役割分担に基いて各々が各々の力を最大限に発揮出来るよう、事に邁進せられたし。以上だ」

教壇に立つ男子生徒はその独特の硬い口調を崩さず、クラス委員という立場からはつきりとクラス中にその声を響かせた。

一年A組のクラス委員 しぶや えいじ 渋谷英二は責任感の強い生徒でその頑な

な態度は教師には好評だった。

もつとも、生徒からすれば彼の態度は普段から何処か偉そうで鼻につく。所謂、典型的な嫌われ者の性格なのだ。

「にしても、相変わらずうちの教授は凜々しいことで」

祐斗はあくまで口の中で呟くように言った。祐斗は教授　つまり、英二が嫌いだった。

と、かなり小さい声で言ったにも関わらず、何処からか笑い声のようなものが聞こえてきた。

「ふふ、言えてますね。噂じゃ今回の学園祭、生徒会の代表で学年全体を彼が取り仕切るらしいですよ」

「へ……?」

不意に和人ではない声が耳に響いて、祐斗は素っ頓狂な声を上げてしまった。声の主は隣の席にいた優しい顔立ちの少年だった。

「……えっと……」

「はあ……どうやら、檜山君と同様、僕の顔と名前の方も一致していないようですな」

如何にもわからなそうに眉をひそめていた祐斗に少年が困り顔で苦笑する。

そう。一見して美少年であることはわかる。しかし、肝心の名前がどうしても思い出せない。

入学から半年以上立っている時期にも関わらずだ。考えてみれば祐斗はかなり薄情者である。

「いいですよ。あなたのそういうところは今に始まったことではありませんし……何より僕は、比較的心が広い方なのでねっ」

少年は再び微笑むと、祐斗にウィンクを送った。些か今の年齢には似つかわしくない大人びた仕草。相手が女子なら思わずドキッとしてしまうところだ。

「……変わった奴だな、おまえ」

「む、随分な物言いですね。ま、いいです」

少し膨れたようだが、すぐに表情を戻し少年はおもむろに名乗り始めた。

「僕は皇<sup>すめらみ</sup>紘<sup>こう</sup>太<sup>たい</sup>。あなたがさっき言っていた教授は僕の幼馴染みですよ」

「え？」

その言葉に祐斗はもう一度教壇に立つ英二を凝視する。彼は相変わらず頑なな表情を変えず、雑務を淡々とこなしていた。

あの”堅物クン”の目の前の”優男”が幼馴染み。この、全く正反對の性格をしている彼らが。俄かには信じ難い事実だった。

しかし、目の前の美少年　鉦大は相変わらず好意的な笑みを絶やさず、如何にも祐斗の反応を楽しそうに見つめていた。

「……んだよ」

「いいえ？　何でもありませんよ」

「……………」

ヘンなやつ、それが祐斗の鉦大に対する第一印象だった。

今まで自分をここまであからさまに楽しそうに眺める人間を彼は見た事がない。

中学時代の透子は　まあ、別の意味で微笑みを絶やさない少女だったが、

彼女と鉦大とは全く別の人種であることは火を見るよりも明らかだろう。

彼女の場合は祐斗に対する好意が含まれていたが、目の前の美少年の瞳は明らかに違う。

もつとも、男同士で好意を持たれても困るが、何よりその笑みは意図が掴めない。

一見すれば、楽しそう、嬉しそう、という形容も強ち間違っではないが、

明らかにそれとは違う念も込められているのは明白だった。

やがて、一通り学園祭の準備に区切りがつき、祐斗は和人と共に学園の校門で帰路に発とうとしていた。

しかし、一見して二人は仲の良い友人同士に見えるが、その顔は何故か優れない。

その理由は何より数メートル離れた少女の存在にあった。

胸辺りまであるロングヘアは生まれつきウェーブがかかり、少女は姫野学園指定の制服を上品に着こなしている。

美奈子である。一通りの準備が終わった後、和人が彼女のクラスへ行って態々連れてきたのだ。目的は勿論　つい先日 of 謝罪。

しかし、謝罪と言っても何から話せばいいかわからず、暫し三人の間に重苦しい静寂が訪れた。やがて、その沈黙を破るように誰かが一つ溜息をつく

「おい……このままボツとしていいのか？」

祐斗だった。その一言に美奈子の体が少し震える。

「……すみません。で、では……まず謝らせてください。」

この度は、一個人の判断で勝手なことをしてしまい、誠に申し訳ありませんでした。

あなたの気持ちを考えることも出来ず今に至ること……本当に、申し訳御座いません」

祐斗の言葉に促されるようにして美奈子が頭を下げる。彼がそれを用意して声をあげたのか、と和人は思わず祐斗を凝視した。

視線の先の祐斗は相変わらず無表情のまま視線は美奈子に向けている。見る人から見れば怒っているとも感じられるかもしれない。

と、やがて祐斗はフツと笑みを零し、首を横に振った。

「え……」

きょとん、とする美奈子。それを見て、和人が大袈裟に肩を竦めた。

「たしかに今回、君の行動は度が過ぎていた。」

正直、過去を引き出されてあまりいい気分はしなかったよ」

「祐斗。」

「まあ待て」

何か言いたそうな和人を制し、祐斗は美奈子に向き直る。

「前に俺は言ったな。『人の過去は本人ですら時間をかけて蓋をしてしまいたいものも存在する』と」

「……はい」

勿論、美奈子もその時の事は覚えている。というより、忘れられない、と言った方が幾分適切だろうか。

何故なら、それを言った時の祐斗の顔は忘れたくてもそう簡単に忘れられるものではないのだから。

憤怒、嫌悪　そして、微かな悲しみを湛えた祐斗の表情。それを思い出すだけで美奈子の心はチクリと痛む。

しかし、今日の前の現実から目をそらしてはいけない。それをしたなら、どんなに言葉を並べても謝罪にはならないからだ。

美奈子は極力祐斗から意識をそらさないようにしながらも、その躰は小刻みに震えていた。

和人は一瞬、その肩を支えてやりたい衝動に駆られたが、もはやそれすら許されない。

こうしてしまったのは美奈子の軽率な行動と、およそ和人らしからぬ無慈悲な行動の結果。

心臓を貫くような鈍い痛みが和人の胸に突き刺さる。もはや、まともな美奈子の顔さえ見れない。

「……俺の過去はその典型的な例、とだけ言っておく。

例え相手が親しい人でも、今後一切このような真似はするな。それが約束出来るなら、これ以上君を咎めることはしない」

祐斗は真っ直ぐに美奈子を見つめた。美奈子もほぼ泣き顔とも形容出来る顔ながら、真っ直ぐ祐斗を見てる。

「お約束します。もう二度と、このような醜態を晒すことはありません。もしそのようなことに再びなったら、私は如何なる贖罪をも受ける覚悟です」

醜態。強ち間違つてはいないが、傍目典型的なお嬢様である美奈子からは到底浮かんでこない言葉だ。

祐斗はその美奈子の真っ直ぐな瞳を捉えながら、やがてコクリと頭を縦に振った。その刹那、一つ溜息が漏れる。

「……これで、取り敢えず一件落着、か？」

「そうだな。彼女も反省しているようだし、俺もこれ以上腹を立てていたくない」

その言葉に和人が再び溜息まじりに頷く。

「よっしゃ。んじゃ、景気祝いにどっか寄り道して行かねえか？  
勿論、西篠さんも一緒に」

「えっ……？」

驚いて和人を見つめる美奈子。

如何にも「いいんですか？」と言いたげだった。  
その視線を感じて振り向くと和人は一笑した。

「なっ、それくらいいいだろ、祐斗？ もう彼女は俺達と同じ学友  
同士だ。」

ま、ちょっと遠回りしたが、これで俺の望みも達成されたって



訳だな」

「？」

如何にもわからなそうな美奈子を余所に祐斗は和人に向かって小さく溜息をつく。

「結局それか……なんて現金なやつだ」

「失敬なっ！ 忍耐力がある、と言ってくれ」

「冗談。ただ”がめつい”だけのくせに」

「ぐっ……かはっ！  
効いた。今のは事実なだけに無駄に効力が高いぞ、祐斗！」

「否定しないんだな。やっぱり俺、お前との付き合い考え直そうかな」

「うっ……そ、それだけはやめてくれ！  
折角またこうして一緒に歩けるようになったのに」

くくっ、と泣いてみせる和人。その肩に祐斗は手を回し、宥める。

「はいはい。そんなことはどうでもいいから、早く行こうな」

そうしてそんな軽口を叩きながら、祐斗と和人は校門を出て行く。そんな中、見慣れぬ目の前の状況にきょとんとしてそれを見つめている美奈子。

「あ、待ってくださいっ！」

やがて美奈子は気づいたように二人の背中を追うと、心持ち若干の緊張を示しながら手に持っている鞆を両手で持ち直す。

幸いそこには、先ほどまでの悲しみと苦しみに満ちた表情はない。ともあれ、この件は一件落着いたのだった。

それから連日、祐斗は和人と共に美奈子を引き連れて街に出て遊んだ。

最初は緊張していた美奈子も段々打ち解け、今や完全に場に馴染んでいる。

いつもは近寄り難い財閥のお嬢様。その実態はあまりに素朴で、その上可憐でもあった。

小さい頃から箱入り娘だったが故の世間知らずな一面。

電車やバスの乗り方もロクにわからず、その度に和人が彼女の世話を焼いた。

もつとも、和人はそのお陰で彼女との接触が増えて大喜びだったが。

そうして時は流れ、翌日の放課後。

祐斗は久方ぶりに敷地内の教会前へ足を運ぶ。

案の定そこには見慣れた先客の姿があった。

「よっ、久しぶりだな」

「祐斗さん……………はい、お久しぶりです」

結衣は祐斗の言葉に反応こそするが、しかし依然としてその顔は優れない。怪訝する祐斗。

やがて、彼は結衣が座っているベンチとは別のベンチに座るとおもむろに口を開いた。

「元氣……………ないな。」

「……………」

何も答えない結衣。ずっと会いたかった彼に会えたはずなのに、そこにはかつての明るさはない。

「……………先日、祐斗さんのご両親のお話を訊いてから、色々考えていました」

「えっ？」

祐斗が振り向くといつも以上の儚さを宿して、結衣は再び口を開いた。

「実は私、父を交通事故で亡くしているんです」

「！」

「……………」

結衣にとって辛いはずの過去。それをさも簡単に言つてのける彼女に祐斗は驚きを隠せなかった。  
祐斗ですら結衣に自分の過去を話す時、少し躊躇いがあったのに今の彼女にはそれが全く感じられない。

「結衣……………おまえ」

「心配なさらないでくださいね……………私は、大丈夫ですから。  
あなたに私の過去を訊いて貰いたい。今はその事しか頭にありません」

「……………」

絶えず小さく微笑みながら、やがて意を決して結衣は話の続きを口にする。

「……………父がこの世を去ったのは、私がまだ幼稚園の年少さんの頃です」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3688a/>

---

不協和音

2010年10月9日03時04分発行